

# いずみさの昔と今 第315回

## 「高度経済成長期の泉佐野と人々の暮らし」

3月21日(祝)まで開催中の歴史館いずみさの冬季企画展「むかしなつかし 昭和の暮らし」に関連して、昭和時代の泉佐野と人々の暮らしを振り返ります。最終回となる今回は、高度経済成長期の泉佐野の発展と人々の暮らしを見ていきたいと思います。

第二次世界大戦の終戦を迎えて間もない昭和23(1948)年4月、泉佐野町は市制を施行し、泉佐野市と改められました。市制施行当時は戦争による物資不足で自由を強いられた時代であり、ガスや上下水道も未整備でした。また市役所関係の行政機関も、警察署のように泉佐野時代のものを引き続き使用するものもあるなど未整備でした。しかし昭和25(1950)年に朝鮮戦争が起ると日本に特需がもたらされ、日本は高度経済成長期を迎えます。このような時代背景のもと、泉佐野市は高度経済成長と共に発展していきました。特に昭和25年から昭和30年代までの間は、図書館や病院、市民会館など市立の公共施設が相次いで完成しています。また高度経済成長期になると商店街にも活気が戻りはじめ、戦前より栄えていた佐野町場の商店街に加え、昭和42(1967)年に駅上商店街、昭和44(1969)年に

ショッピングデパート・ニチイ泉佐野店が相次いで誕生し、泉佐野駅周辺は買い物客で盛況となりました。

高度経済成長期真っ只中であった昭和30~40年代は、日常生活にモノがあふれた時代でした。今では当たり前となった電化製品の多くはこの頃に普及し、炊飯の手間を軽減した電気炊飯器や、三種の神器(白黒テレビ・電気冷蔵庫・電気洗濯機)・3C(カラーテレビ・クーラー・カー)の普及は人々の生活を一変させました。とりわけ皇太子(現上皇)のご成婚をきっかけにテレビの普及に拍車がかかり、泉佐野市内のテレビ普及率をみても、昭和29(1954)年に6台だった普及台数が昭和32(1957)年には658台へと急増し、昭和48(1973)年には普及率が市民の79%にまで伸びています。こうしたテレビの普及により、人々の娯楽の中心は映画からテレビへ移り、数々のスターや人気番組が誕生しました。こうして高度経済成長期を経て電化製品の普及は進み続け、かつての生活様式は次第に変化し、昭和の終わり頃にはあらゆる生活の道具が電化しました。また、従来ジカセのように機能を複合した機

器などこれまでに無かった新形態の電子機器も数多く登場しました。昭和から平成・令和へ向かい、人々のくらしは日々進化し、それに伴い街の風景も変化し続けていきます。展示室で懐かしの昭和のくらしを振り返ってみてはいかがでしょうか。



▶現在展示中の家具調カラーテレビ (昭和40年代、館蔵)

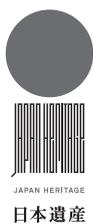
レイクアルスタープラザ・カワサキ歴史館いずみさの  
☎469-7140 Fax469-7141  
休館日 月曜日、毎月最終木曜日 (いずれも祝日の場合は開館し、その翌日が休館)  
開館時間 午前9時~午後5時 (入館は午後4時30分まで)  
入館料 無料

## 日本遺産・北前船文化を巡る①

### ~日本遺産への追加認定について~

「日本遺産」に追加認定された「荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間 ~北前船寄港地・船主集落~」のストーリーを構成する泉佐野市の文化財等を紹介し

問合せ 文化財保護課



令和2年6月19日、「荒波を超えた男たちの夢が紡いだ異空間 ~北前船寄港地・船主集落~」「葛城修験 - 里人とともに守り伝える修験道はじまりの地」の2つの日本遺産に、本市が認定されました。この2つの日本遺産は、複数の市町村にまたがってストーリーが展開する「シリアル型」の日本遺産で、全国的なPRの展開が期待されます。この認定により、泉佐野市は日根荘と合わせて『3つの日本遺産があるまち』となりました。

江戸時代、北海道・東北・北陸と西日本を結んだ西廻り航路は経済の大動脈であり、この航路を利用した商船は「北前船」と呼ばれました。日本海や瀬戸内海沿岸に残る数多くの寄港地・船主集落は、北前船の壮大な世界を今に伝えています。今月からこの日本遺産コーナーでは「北前船文化を巡る」と題して、食野家や旧佐野浦の街並みなど、本市における日本遺産関連の構成文化財などを紹介します。



▲日本遺産に認定された全国48の北前船寄港地・船主集落